

# 大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

計画名 Plan	ラオスの養蜂の技術実践と家畜化をめぐる人類学的研究の予備調査
氏名 Name	続木梨愛
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究科・文化人類学専攻・修士2年
渡航国 Country	ラオス・シェンクワン
渡航日程 Travel schedule	2024年3月5日(火)～2024年3月23日(土)

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

ラオス・シェンクワン県にて、博士課程でおこなう自身の研究（研究題目「養蜂の技術実践と家畜化をめぐる人類学的研究：ラオスにおける国際開発援助の事例から」）を実施するにあたって必要な情報を収集するためのフィールド予備調査を行うことを目的として渡航した。

博士研究の最終目的は、ラオスの養蜂者と環境指標動物とされるハチとの相互関係を事例に、国際援助による支援を受ける養蜂の実践を技術・道具の変容への着目から考察し、人間と動物／自然の共生に向けた新たな視座を提示するものである。本フィールド調査では、2024年度からの本格的な研究の予備調査として、4つの課題のうち〔課題②〕NPO 支援対象地域における養蜂の実態調査〔課題③〕換金作物としての蜂蜜と市場経済の調査のための、具体的な調査フィールドの検討や養蜂家とのネットワーク作り、シェンクワン県内および首都ヴィエンチャンの小売店などを対象とした蜂蜜販売拠点の調査やバイヤーへの聞き取りなどを実施することを計画した。

実際には、最初の5日間で首都ヴィエンチャンの蜂蜜販売状況の現地調査と、残りの2週間で日本NPO団体（認定NPO法人テラ・ルネッサンス）の協力のもと、同団体の支援が入っているシェンクワン県ペック群ムアン村とポンカム村を中心として、支援を行っている職員および支援を受けている現地の養蜂家、蜂蜜の売買を日常的に行っている人々を対象に聞き取り調査を行った。後半の聞き取り調査では、養蜂を行っている10世帯と現地の群農林水産課の養蜂担当者へのインタビューを、NPO法人スタッフの通訳のもと実施した。

### 成果 Outcome

本フィールド調査の到達目標であった①ラオス・シェンクワン県内におけるNPOの養蜂支援活動が現地どのように展開され、養蜂家が実際にどのような技術・道具を用いて養蜂実践を行っているのかを明らかにすること、②シェンクワンおよび首都ヴィエンチャンにおける蜂蜜の市場調査を通して①で見られたような方法で生産された蜂蜜が市場にてどのようなネットワークのもと販売されているのかを明らかにすることに関しては、前者は調査を通して概ね明らかにすることができたものの、後者は必要最低限の情報を得られるのみにとどまった。

まず到達目標①に関しては、聞き取り調査を通して、支援を受ける人々の基本情報に加えて養蜂歴や保持している巣箱の数と形態、蜂蜜の収穫量、蜂蜜の消費方法などについて十分な情報を得た。調査地では主に

ラオ族とモン族が生活しており、21歳から80歳までの男女が2020年以降に支援を受けて養蜂を開始していた。しかし保持している巣箱に関しては、NPOが支援した日本式巣箱だけでなくそれらを改変したオリジナルの巣箱や木の洞、ラオス軍の弾薬入れとして使われていた木箱などが用いられていた。蜂蜜の収穫量は養蜂家によって大きく異なるが、それらの多くはNPOによって購入され商品として製品化されていた。蜂蜜の自家消費方法に関しては、日本のようにパンにつけて食べるといったような事例は無く、そのまま食べたり焼酎・ハーブ酒に混ぜて薬として飲んだりすることが多いようであった。NPOの支援活動は、現在はプロジェクトとプロジェクトの間の期間であるため具体的な支援ではなく定期的なフォローアップを行っているのみであった。こちらに関しては2024年夏の渡航で詳しく調査する予定である。



【写真：(左) 日本式の巣箱 (右) 弾薬入れを活用した巣箱、2024年3月12日、共に筆者撮影】

到達目標②に関しては、シェンクワンおよび首都ヴィエンチャンの市場および小売店にて実施調査を行い、どのような蜂蜜が市場に出回っているかを確認したのに加え、養蜂家への聞き取り調査でバイヤーを通して蜂蜜を売っているという情報を得た。首都ヴィエンチャンの比較的大きな小売店ではラオス産の蜂蜜は一つもなく、ほとんどが隣国タイ産であった。シェンクワンではカフェや博物館などでシェンクワン産の蜂蜜が販売されている他、市場でも蜂蜜が(蜂ごと)売られていた。養蜂家のいる村にベトナムやヴィエンチャン・タイからバイヤーがやってきて直接蜂蜜を買い取っているという話を聞いたが、具体的なネットワークについては明らかにすることができなかった。



【写真：(左) 首都ヴィエンチャンの大型小売店の蜂蜜コーナー、2024年3月8日 (右) シェンクワンの朝市、2024年3月18日、共に筆者撮影、

## **今後の展望 Prospects for the future**

博士課程入学後に本格的に始まる調査のための予備調査として今回のフィールド調査を位置付けており、調査を進めるために十分な情報収集と関連人物との関係構築を行うことができたと考えている。ただ、上述したように蜂蜜の市場経済に関する調査については引き続き情報収集が必要である。これらの調査を遂行するにあたって問題となるのは調査者の言語力である。今回はNPO 協力のもと NPO 関係者に対する聞き取り調査が可能になったが、その範囲外であるバイヤーや市場出展者に対する聞き取り調査はほとんどできなかった。また、養蜂家についての聞き取り結果もすべてスタッフの通訳を介して得た情報であるため、誤訳や三者間での勘違いが発生している可能性がある。引き続き国内でも言語力の向上を図ると共に、今回のフィールド予備調査で得た情報をもとに今後の本調査の計画を立て直し、博士論文執筆に向けた調査を続けていきたい。